

【34】晴天の水害

東京、大阪が典型的な例ですが、海に近い河川下流域には標高の低い土地が広がっており、処によっては海面の高さ（満潮位）より低い、いわゆるゼロメートル地帯が存在します。

天然、自然の状況だったら、ゼロメートル地帯なんて土地は存在せず、水が入ってきたり溜まったりして湖沼が入江になっているはずで、人が住んだり土地として利用したり出来るわけがありません。ゼロメートル地帯は、元々は低くても海面よりは高かった土地が、農地や市街地として利用されるようになった後に、地下水の汲み上げで地盤沈下が進み海面より低くなってしまったものです。地盤沈下には年月がかかるので、住民は逃げないで堤防で土地を囲んで海水や洪水の侵入を防ぎ、入ってきた水や雨水は排水ポンプで強制排除するなどの対策をこうじながら住んでいるのです。

東京の江戸川区南部の東京湾に近いゼロメートル地帯に、江戸時代に開削された運河に由来する「新川」という河川があり、荒川への出入口に水門が設けられています。数十年前の古いこととなりますが、天気の良い真昼の満潮時に突然水門のゲートが開き、新川沿いの建物や土地が浸水する災害というのか事故というのか、変事が発生しました。水門のゲートの開閉が自動制御にしてあったのが、開けるべき条件ではないのに故障でゲートが開いてしまったのです。当時、“晴天の水害”としてニュースになりました。

ゼロメートル地帯の安全性は、施設や装置に依存する“制御安全”で確保されているのです。